私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。
公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

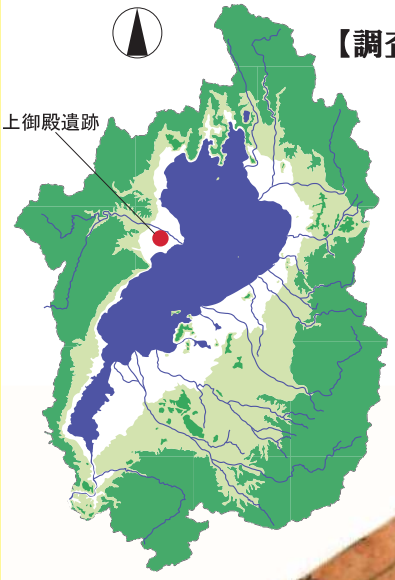
季刊 みる・きく・ふれる 文化財

おうみ文化財通信 vol.17

Information of Cultural Heritage in OHMI

2013 Autumn

公益財団法人滋賀県文化財保護協会は文化財をとおしてゆたかな滋賀づくりに貢献します。



【調査速報１】高島市安曇川町上御殿（かみごてん）遺跡

謎の短剣鋳型

【双環柄頭短剣鋳型】
長さ約 29.5cm、幅約 8.8cm、厚さ約 4.4cm（写真上）・3.6cm（同下）。シルト岩を用い、柄と剣身を一回で鋳込む一鋳式のものですが、実際に鋳込んだ痕跡はみられません。柄の部分には綾杉文（写真上）、複合鋸歯文と綾杉文（同下）と面によって異なる文様が彫り込まれています。

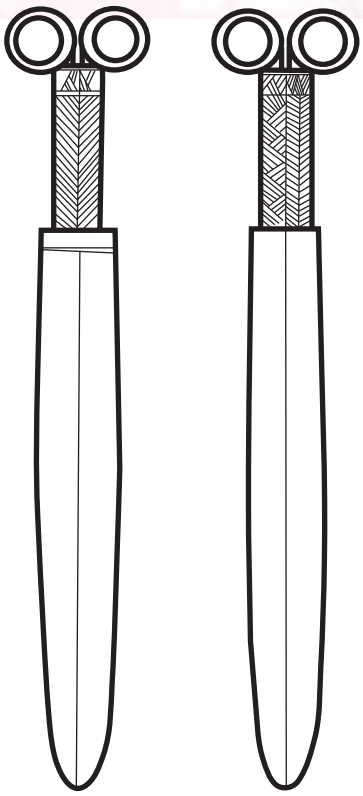
●平成20年度から行っています上御殿遺跡の発掘調査では、これまでに縄文時代から室町時代にいたる様々な遺物や遺構がみつかっています。

今夏の上御殿遺跡での調査において、全国的にも類例のない短剣の鋳型が出土しました。双環柄頭短剣（そうかんつかがしらたんけん）と呼ばれ、柄頭にならんだ２つの環が特徴です。この鋳型は、微高地から低地へ傾斜する場所から２枚の鋳型の鋳込み面をあわせた状態で出土しました。鋳型の周囲に穴などが掘られた痕跡がないことや、他の遺物がないこと、上下あわせた状態であったことから、この傾斜地に単独でなんらかの意図を持って置かれたものと推測されます。

この鋳型に彫り込まれた短剣は、剣身・柄・柄頭が一体で鋳込まれることや柄頭が双環となること、柄に文様をもち、剣身は直刃で、脊（むね）や樋（ひ）がないことが特徴です。別鋳で鋳込まれ、剣身は抉りや突起をもち、脊や樋がある国内の弥生時代の銅剣とは全く異なっています。

このような短剣は、国内はもとより朝鮮半島にもなく、中国北方（河北省北部、内蒙古中南部）地域の春秋戦国時代（BC.770 ～ BC.221）のオルドス式短剣と呼ばれる銅剣との類似性が認められます。しかしながら、上御殿遺跡の鋳型には、柄の部分に綾杉文や複合鋸歯文を組み合わせた文様が彫り込まれており、日本の銅鐸・武器形青銅器や中国東北部から朝鮮半島を中心に分布する多紐鏡に用いられる文様が取り入れられるなどオルドス式短剣とは異なる部分も見いだせます。以上の点より、この鋳型は、オルドス式短剣をモデルとして、他の要素を加えて弥生時代中期～古墳時代前期(BC.350 ～ AD.300)頃に国内で製作されたものと考えられます。今回の鋳型の出土は、弥生時代の青銅器文化研究に新たな一石を投じる資料となります。

（写真：滋賀県教育委員会提供）



【復元短剣模式図】

＊上御殿遺跡の現地説明会資料は、当協会ホームページからダウンロードできます。 ☛http://www.shiga-bunkazai.jp/

【調査速報２】高島市安曇川町上御殿（かみごてん）遺跡

「守君舩人」あなたは誰？ 木製祭祀遺物と人名墨書土器

【出土した人形代の顔】

■人形代や馬形代が集中する付近から人名が書かれた土器が出土しました。小型の土師器甕の体部に縦書きで等間隔に７列「守君舩人」（もりのきみのふなひと）と書かれています。このような墨書土器は、県内はもとより平城京や平安京といった祭祀遺物が豊富な場所でもみつかっていません。甕は奈良時代末から平安時代初頭頃のもので、人形代などと一緒に祭祀に用いられたものです。同じ人名を７列にも墨書している点から、この人物が上御殿遺跡での祭祀に深くかかわっていたことがわかります。

さて、この「守君舩人」について特定できる資料は現在のところありませんが、「守君」氏は美濃（岐阜県）の豪族である牟儀君（むげつのきみ）と同族とされ、水の祭祀にかかわる氏族とみられています。守君舩人も上御殿遺跡付近に住み、水辺の祭祀を執り行っていたのでしょうか。

（写真：滋賀県教育委員会提供）

■人形代（ひとかたしろ）などの古代の祭祀遺物は、『おうみ文化財通信』14号でも一部紹介しましたが、新たに形代をはじめとする多くの祭祀遺物が出土しました。その数は、人形代で51点、馬形代で23点となり、県内で出土した形代では一番多い出土数となります。また、県内の人形代の大半が限られた短い時期での出土品であるのに対して、上御殿遺跡では８世紀から12世紀までの人形代が出土しています。同一の場所で数百年もの間、継続して人形代祭祀を執り行っていた点も遺跡の特徴をあらわしています。

高島市内で古代の祭祀遺物が出土した遺跡は、鴨遺跡（人形代・陽物形代・斎串）・永田遺跡（陽物形代・斎串）・針江北遺跡（人形代）・日置前遺跡（斎串）があり、これらの遺跡はいずれも官衙など公的な性格が考えられています。中でも鴨遺跡や永田遺跡は上御殿遺跡に近く、関係が注目されます。また、本遺跡付近には古代の主要港である勝野津や幹線路である北陸道が通るなど交通の要衝でもありました。

【足がついた馬形代】

＊上御殿遺跡の発表資料は、当協会ホームページからダウンロードできます。
☛http://www.shiga-bunkazai.jp/

【収蔵品紹介】

柿叭々鳥図　高橋草坪筆

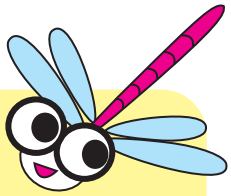
滋賀県立琵琶湖文化館蔵

■高橋草坪（たかはしそうへい）は、1804（文化１）年、豊後国杵築（きつき）城下（現在の大分県杵築市）の商家・槇（まき）屋（高橋氏）久作の二男として生まれました。名は元吉、草坪は画号です。幼少より絵を好んでいた草坪は、わが国文人画の巨匠であり、郷土の大先輩でもある田能村竹田（たのむらちくでん　1777～1835）に学んで、急速に画才を開花させ、竹田とともに京都に出て活躍します。しかし、元来病弱であった草坪は、たびたび体調を崩し、保養のため杵築の実家に帰宅しますが、その間も精力的に画を描いていました。描いた画を竹田のもとに送り、竹田はきめ細かな指導を書簡に書き送るといういわば通信教育のような指導法でした。草坪はしきりに京都行きを望んでいたらしく、竹田はこうした草坪のはやる気持ちを抑えるため、時には痛言を吐きつつ、貴重な意見を何度も書き送りました。当世風の画に染まらぬよう、真の画人となるよう、懇々と説き聞かせる竹田の言葉には、草坪に対する愛情の深さと期待の大きさが満ちています。

病の癒えた草坪は、再び上京し、京坂を中心に活躍を見せますが、徐々に病魔に蝕まれていったようで、結局病は回復には向かわず、1835（天保６）年２月３日、画業半ばにして32歳の若さで大坂天王寺にて病没しました。

図版の画題となっている叭叭鳥（ははちょう）は、八哥鳥（はっかちょう）の別名で、中国原産のムクドリの仲間。全身漆黒の羽毛に覆われ、翼の中ほどに白い斑点があります。美しい声を持ち、人によくなつき、人語などを真似るということで、中国では古来より飼い鳥として親しまれ、花鳥図などの題材にもされました。日本に生息しない鳥であるにもかかわらず、輸入された絵画の模写などによって、日本でも、室町時代以来多くの画家たちによって愛好され、描き継がれてきました。本図の叭叭鳥の黒色と柿の朱色の対比が絶妙で、墨線、着色とも洗練度を増し、画技の進展をあらわす確かな写生力が認められる作品となっています。

本作品は滋賀県立安土城考古博物館に展示されますので、是非お越しください。



琵琶湖文化館所蔵作品特別陳列
琵琶湖文化館秘蔵品で味わう「錦秋から白銀へ」

会　期：平成 25 年 11 月 26 日（火）～平成 26 年 1 月 13 日（月・祝）
会　場：滋賀県立安土城考古博物館　第二常設展示室

山の木々や草花が赤や黄色に鮮やかに色づく秋。足音もなく訪れる寒さは秋の気配を消し、やがて降り積もる雪がすべてを白銀に彩ります。秋から冬の景色を描いた作品を紹介し、季節の移り変わりを感じていただきます。

おうみ文化財通信 vol.17
Information of Cultural Heritage in OHMI
◆平成25年10月1日／編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会／〒520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2／電話：077-548-9780／FAX：077-543-1525／印刷・製本：大津紙業写真印刷株式会社
●本誌の掲載情報は平成25年10月1日現在の情報です。諸般の事情により内容が変更される場合がありますので、お出かけの際はご確認下さい。

【イベント情報】

みる・きく・ふれる <10～12月>

■滋賀県立琵琶湖文化館主催事業■

問合先：(TEL)077-522-8179/(FAX)077-522-9634

日程	時間	イベント名		定員	予約	参加費	会場(集合場所)
10/17(木)	13:30～15:00	講座	滋賀の文化財講座「打出のコヅチ」 『奇想・奇僧の画家たちー若冲・蕭白・月僊・金谷ー』	200	要	無料	コラボしが21 3階 大会議室 (大津市打出浜2ー1)
11/21(木)	13:30～15:00	講座	滋賀の文化財講座「打出のコヅチ」 『梵鐘を守れ！ー地域文化財をめぐる戦時下の裏面史ー』	200	要	無料	コラボしが21 3階 中会議室 (大津市打出浜2ー1)
12/19(木)	13:30～15:00	講座	滋賀の文化財講座「打出のコヅチ」 『普賢菩薩像の表現ー普賢十羅刹女像を中心にー』	200	要	無料	コラボしが21 3階 大会議室 (大津市打出浜2ー1)

▲イベント情報はホームページにも随時掲載しております。☛ http://www2.ocn.ne.jp/~biwa-bun/

■滋賀県埋蔵文化財センター主催事業■

問合先：(TEL)077-548-9681/(FAX)077-548-9682

日程	時間	イベント名		定員	予約	参加費	会場(集合場所)
11/3(日・祝)	9:00～17:00	公開	ロビー展示一般公開(文化ゾーン探検隊スタンプラリー)	なし	不要	無料	滋賀県埋蔵文化財センター
〃	10:00～12:00	体験	「古代の食の実験」(デンプンを作ってみよう)	10	要	無料	滋賀県埋蔵文化財センター

▲イベント情報はホームページにも随時掲載しております。☛ http://www3.ocn.ne.jp/~shiga-mc/

展示

平成25年度下半期滋賀県埋蔵文化財センターロビー展示

「びわ湖の舟と人々のくらし」

【塩津港遺跡舟形代】（写真：滋賀県教育委員会提供）

今回の展示では、最近の発掘調査の成果を生かして、「びわ湖と船」「水辺の祈りとくらし」「みなとの跡（あと）」「運んだもの」をテーマに、遺跡で見つかったびわ湖の水運とびわ湖に関わってきた人々の生きざまを遺構写真や遺物で紹介します。

主な展示：入江内湖遺跡（米原市）出土丸木舟
赤野井浜遺跡（守山市）出土準構造船部材
松原内湖遺跡（彦根市）出土準構造船部材
赤野井湾遺跡（守山市）など出土舟形代
塩津港遺跡（長浜市）出土神像・華鬘・舟形代
天智天皇大御船模型
松原内湖遺跡出土準構造船模型など

新刊予告

2月刊行予定　シリーズ近江の文化財007

「琵琶湖の内湖とその暮らし
ー松原内湖、入江内湖、大中の湖、小中の湖ー」

■Ｂ５判並製本４８頁　オールカラー　販売価格６００円■

近江の文化財の魅力を写真と読みやすい文章で紹介する「シリーズ近江文化財」の第７弾。今回は琵琶湖の周囲に点在する「内湖」に焦点を当てます。砂洲により琵琶湖本湖と隔てられた内湖は水深が浅く、漁場やヨシ刈り場など、さまざまな利用価値がありました。その周囲に暮らした人々が残した各時代の遺跡について解説します。

【内容】第１章　琵琶湖の成り立ちと変遷
第２章　入江内湖：入江内湖遺跡・六反田遺跡・筑摩御厨
第３章　松原内湖：松原内湖遺跡・佐和山城跡・彦根城
第４章　大中の湖・小中の湖：弁天島遺跡・竜ケ崎Ａ遺跡・大中の湖南遺跡

◆書籍の刊行情報はホームページにも随時掲載しております。☛ http://www.shiga-bunkazai.jp/

公益財団法人滋賀県文化財保護協会は、埋蔵文化財の調査、県立安土城考古博物館・県立琵琶湖文化館・埋蔵文化財センターの運営・管理を行っています。